食生活と学校給食に関する調査報告【概要】

1　目的、概要

本調査は、食の指導の充実・推進等を図るため、平成 25 年度に引き続き、児童生徒及び保護者における普段の食生活の実態や、学校給食への理解度、評価について把握・分析を行った。

また、前回の調査結果と比較して、これまでの取り組みの効果等を分析することで、今後、本市が取り組むべき食育施策に資することを目的として実施した。

2　実施方法について

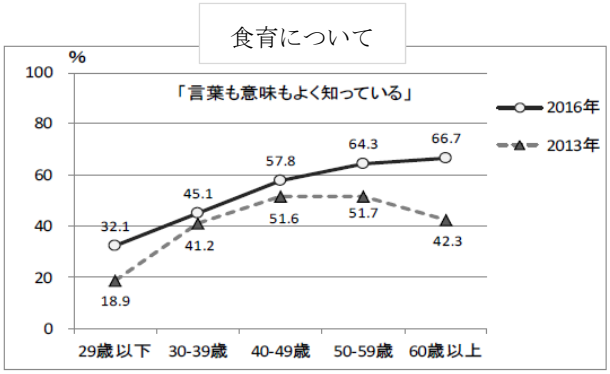
（1）委　託　先：国立大学法人鳥取大学

（2）調査対象者：①市立小学校(44 校)の児童 5 年生(1,677 名)とその保護者
②市立中学校(17 校)の生徒 2 年生(1,589 名)とその保護者

（3）調 査 内 容：アンケート調査(7 月実施)をもとに分析を実施
①普段の食生活、食育の認知・実施状況
②学校給食に対する意識・関心・役割・理解度
③地産地消について

3　調査結果

◆回答率…小学生 97.5%・保護者 89.6%
中学生 94.9%・保護者 85.2%



朝食の摂取状況

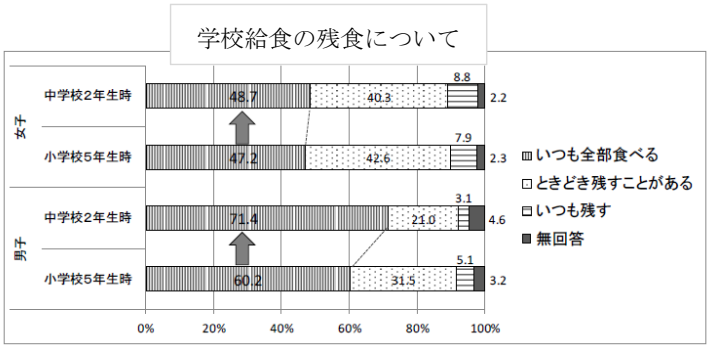
「毎日食べる」割合は、小学生で 90%、中学生 85%、保護者 86%であり前回調査と大きな変化は見られない。

食事の共食状況

夕食は、学齢差なく「家族そろって食べる」割合が 63%程度であり、中学生になっても家族でともに食べる習慣は中学生になっても維持されているが、朝食については中学生の 3 人に一人が「ひとり」で食べている。保護者の意識から見ても、共食を意識している家庭とそうでない家庭の二極化がみられる。

学校給食に関する意識

小中学生ともに 7 割程度は学校給食を好んでおり、前回より「好き」の割合が増加しているが、子どもと保護者の意識を比較すると、子どもより保護者の方が「好き」と認識している。



残食の状況

残食の主な理由は、「きらいなものがある」「量が多すぎる」「時間が足りない」である。

地産地消について

小学生 44%、中学生 57%が、学校給食で地産地消に積極的に取り組んでいることを知っている。保護者は前回と同様 82%が認知しており、家庭でも地産地消を実践している割合は60%であり、割合は年齢が上がるにつれて高くなる傾向にある。

4　まとめと今後の取り組み

「共食志向」の割合は、小学生で 52%であるが、中学生になると 35%に減じる一方で「孤食志向」と「食事が楽しいと感じない」割合の増加がみられる。子どもの孤食問題が取りざたされてきたが、「食事が楽しいと感じない」子どもの抱えている問題は、将来世代間での世代間の連鎖が懸念される。「保護者が朝食を毎日食べる」家庭では、学校給食への関心も高く、栄養及び心情の両側面から教育を期待している。そして、「子どもと朝食を共にする家庭」ほどその意識は高い等、食の多面的機能の認識と結びついていることから、時代を拓く児童生徒の望ましい食習慣の形成については、学校、家庭地域より一層連携する必要がある。学校における食育を推進するために、学校給食の意識を改めて見直すとともに、学校教育活動全体で食に関する指導の充実を図っていく。